

[研究論文]

マハシラー・ヴィラヴォン

—ラオス文人の独立闘争—

吉川 健治（本学 国際社会学部 教授）

- 1 はじめに
- 2 マハシラーの出生と шам 領ラオス
- 3 マハシラーと教育
- 4 ナショナリストとしてのマハシラー
- 5 ラオス独立の夢と現実—束の間の独立
- 6 おわりに

1 はじめに

ラオスに関して明確なイメージを持てる日本人はどのくらいいるだろうか。東南アジアの一国であり、かつてはフランス植民地時代を経て独立し、右派・左派・中立派が繰り広げた内戦時代を経て、ベトナム支援、つまり東側が支援する人民革命党が勝利し、1975年に現在の政権、ラオス民主人民共和国が成立した。これがラオスについてのごく簡単な説明であるが、同じようにフランス植民地を経験し、独立を果たした仏領インドシナのベトナム、カンボジアに比べてもラオスをイメージするのは難しいのではないだろうか。

ベトナムといえば、独立・統一の父、ホーチミンを思い浮かべ、カンボジアといえば、独立中立を貫いたノロドム・シハヌーク国王、あるいはカンボジアの文化的アイデンティティともいえるアンコールワット

が連想される。すぐに外国人が連想できる象徴的な人物や文化的遺産がないことは、ラオスにとって不運なことである。

しかしながらこの不運を導き出した状況は、ラオスという一つの国家の成立過程を検証する際に、極めて重要な示唆をあたえてくれる。

まず、指摘されるべきことはカリスマの不在である。カリスマ的な存在は、地域・住民を統合するものとして機能する。それがイデオロギー的なものでも象徴的な人物でも、人々の間にアイデンティティを醸成する触媒的カリスマの存在がラオスにはなかなか現れなかった。

多民族が住み、多数の文化、言語が存在するラオスだからこそ、民族の壁を越えてもおお形成されるラオスのナショナリズムの根拠となるものの必要性はより高かったはずである。

1343年にラオスを初めて統一したラーンサーン王国からの長い伝統を引き継ぐラオスに、そのような気運が生まれなかった理由は、ラオスの伝統的な政治、統治体制の特徴にある。それは、いわゆる「マンダラ」と呼ばれる東南アジア特有の世界観で、明確な領土意識を持たず、周囲の権力との朝貢関係によって相互の力関係（上下の関係）を確認するものであった。さらにこの関係は、従属を強いるものではなく、かなりの自治も認められていた¹。マンダラ世界観を共有する王族や有力領主たちは、その関係性を維持していれば互いの特権的な立場は認められたわけである。1934年にフランスがラオスを保護領とした際も、それまで支配されていたシャムとの関係のように、ラオスの有力者たちは、フランスとの関係性を土着的な発想で認識していたのかもしれない。そして、そうした土壌にはラオ族とは何か、という「想像の共同体」の重要素材を生み出す努力が必要とされなかったのかもしれない。それが、カリスマ不在の状況を生み出した、と考えることも可能であろう。

本稿で述べるマハシラー・ヴィラヴォンは、そうした状況の中で、ラオス独立を目指しアイデンティティ形成に果敢に取り組んだナショナ

リストのひとりである。

シャム領ラオスの伝統的なラオ族の農村に生まれ、バンコクでも勉学を続けた市井の知識人で、政治運動にも積極的に参加する一方、ラオス最初のラオス語辞典の編纂、仏教関連の書籍、古典文学の現代訳など、1930年代以降の文人としての活躍は顕著である。

ラオス現代史については脱植民地運動から独立まで、そして1975年の社会主義政権誕生に至る、インドシナ戦争や冷戦下の東西陣営の駆け引き、それを反映したラオス内部の混乱という政治的側面で語られることが多い。本稿では、国民国家形成における文化ナショナリズムに重要な役割を果たした文人マハシラーに焦点を当て、ラオス国家の統合過程における民族的アイデンティティ形成の一側面を検証したい。

2 マハシラーの出生とシャム領ラオス

2-1 ラオスの伝統的領域概念と「マンダラ」世界観

ラオスの近代以前を考えると、現代の私たちの頭にある国境線が細かにひかれた地図の概念を白紙状態に「初期化」する必要がある。

マハシラー・ヴィラヴォン（1905-1987）は、現在のタイ東北部にあるタイ国ローイエット県で生まれている。現代的に言えば、「タイ国に生まれた」という表現が適切に思えるが、彼が出生した時代のタイ東北部は、ラオ文化圏であり、ラオの王の領土という認識が一般的だった²。

ヨーロッパで発展してきた主権国家・国民国家という概念は、「領土」、「国民」、「統治体制」をその構成要素としている。一方、内陸部東南アジアで同系の民族といわれるタイ人、ラオス人の「国」という考え方の中は、領土の範囲が極めて曖昧で、明確に領土を測定することに不熱心だった³。

その不熱心さは、タイ系の民族が共有する空間概念に一つの理由が求

められる。タイ系民族は、10世紀まで中国雲南省で、稲作技術を持ち小さな集落群を作って生活していたとされる。中国の史料には、7世紀ごろ南にタイ族6つの詔があると記載されているという⁴。盆地に形成されたタイ族の王国群で、現代ではタイ民族の南詔時代と呼ばれている王国群である。「詔」とはタイ・ラオ語で、Chao（王）という意味で、小規模なムアンと呼ばれる王国が点在していた。この小さな古代国家群は、一定の領域を治める王が、上位の権力構造から承認を受けることによって、その権力を保持していたと考えられる。国を示すムアンという言葉は、今日もムアン・タイやムアン・ラオスのように国を表す言葉として使われるが、小規模な村もムアンと呼ぶ。

ムアンという概念は、タイ系民族の国家概念を理解する上で重要である⁵。ある一定の領域で、小規模なムアンが点在する場合、有力なムアンの王（領主）から信任を得られれば、小規模ムアンはその地域において自治を認められた存在と証明されたことになるからだ。実はこのような概念は、国民国家成立前の内陸部東南アジア世界を形成する基盤でもあったと思われる。南詔時代には、中国に朝貢して信任をえることで承認され、また東南アジア内陸部にタイ族が南下した12世紀ごろには、クメール帝国がその信任の役割を持っていたものと思われる。こうしたムアンを中心とする各領域の関係性は、近代まで続いていた。シャムに対するラオ族王朝の関係性、ラオス国内でのルアンプラバン王朝、ヴィエンチャン王朝、チャンパサック王朝の関係性、いずれをとっても支配か被支配の関係性を確認しあうことで安定が保たれていた。王という立場がインド思想の影響で神聖化されると、人々は神格化された自らの王の庇護を受け、王はより有力な権力者から信任を受け領域の安定化を図った。

有力な権力者とはいえ、時間に伴って盛衰を繰り返すので、信任を授けまた受ける権力者の関係性も空間も可変的である。近代化以前の東南

アジアの国家観は、領域を明確に規定するヨーロッパのそれとは基本的に異なっていた。これが「マンダラ」と呼ばれる独特の世界観で、東南アジア内陸部では3世紀に成立した扶南（現在のカンボジア）から19世紀まで続いた⁶。

領域意識の目覚めは、東南アジア地域のほとんどがヨーロッパ列強によって支配されてからである。宗主国はヨーロッパ型統治システムの重要要素である「領土」の画定に乗り出し、独立を維持したタイもその影響を受け、次第に統治すべき範囲を限定する必要性にかられた。植民地であった国々も宗主国によって領土範囲が策定され、独立を契機に現在の国境線が完成した。ようやく主権国家を単位とする統治方法、つまりウエストファリア体制が東南アジアで一般化したのは、20世紀後半になってからである。

現在のタイ、ラオスを考える場合もまず、古代から近代までの伝統的な領域様式を理解しておく必要がある。明確な国境線が長い間なかったことは、民族・文化・言語などに国境を跨いだグレーゾーンがあるということでもある。これが冒頭に言及した私たちの地図概念を「初期化」しなければいけない理由である。

2-2 マハシラー・ヴィラヴォンの出生と教育⁷

マハシラーが生まれた1905年頃は、ヨーロッパ列強のアジア進出によって主権国家という概念が次第に理解されつつあった時期といえるだろう。ラオスと呼ばれる領域は、1300年代に成立したラーンサーン王国の勢力が及ぶ範囲、つまり現在のラオスとタイ東北部の広大な地域がラオ族の領域と理解されていた。フランスがベトナムを植民地化し、東南アジア内陸部に緊張が生じ、1893年、シャムとフランスとの間に結ばれた条約によって、現在の東北タイ、つまりメコン川以南のほとんどをシャムが支配し、メコン川以北がフランス保護領となった。フラン

スの介入によって、シャム、ラオスのほぼ国境線が確定し、この地域の独特のマンドラ世界は表面的には解消された。また、その結果、メコン川以南のラオ族の文化圏は大きくシャムに割譲された。現代にいたってもこの国境線はほとんど変わらずに存在している。

2-3 シャム領ラオス

マハシラーの出生時には、ローイエットはすでにシャム領となっていたが、マハシラー自身の回想によると、当時の生活はラオ文化圏の生活そのものであり、都市や近代化、進出してきた西洋文化の影響もほとんど受けていないラオ族の典型的な農村であったと述べられている。シャムの中央であるトンブリ、バンコクからは遠く、仏領ラオスとはメコン川で隔てられ、その影響も受けないいわば田舎そのものであった。マハシラー自身も回想録の冒頭で「私は田舎の生まれで」と書き、典型的なラオ文化の中に育った様子が記されている。

当時ラオ族の居住する村は、どの村も同じような生活形態を保持していた。マハシラーの回想によれば、この地域の人口は1万5千人でどの世帯も例外なくみな稲作を生業としており、もち米を主食としていた。身につける衣服もまた同様に自給されていた。綿を植え、農作業が大方終わる乾期には、糸をつむぐため、女性たちが高床式住宅の1階部分に集まり共同で糸を紡いでいた。また、絹を作るために蚕を養うのが若い女性の仕事であった。できた繭は、女性たちの共同作業としてシルク糸となる。自宅に必ず植えられていた藍の木の葉で染色され機を織り、自家消費する衣類はこれで賄われた。衣食住に関しては、自給が当たり前の生活だった。

2-4 ラオ族の文化的領域

このようなラオスタイルの生活は、現在のラオス北部で生まれたプー

ミー・ヴォンウィチット元国家元首代行の自叙伝にも描かれている。プーミーが生まれたのは、現在ラオスの北部フアパン県であるが、ここで描かれる農村の風景も、稲作を中心とした自給自足社会で、ラオ族の典型的な生活様式である⁸。現在のラオス・中国国境からタイ東北部の広大な領域にラオ文化圏が形成されてきた証左であろう。

マハシラーが生まれる少し前、この地を旅した日本人の記録が残っている。その記述からもラオ族の領地、とりわけバンコクから見て東北タイの入口にあたるコラート（ナコンラチャシマー）をシャム文化圏とラオ文化圏の境界と記述している。これはバンコクからラオスを経て、ベトナムにいたる紀行文で『暹羅・老撾・安南、三国探検実記』（明治30年）として出版されている⁹。著者は岩本千綱という元軍人で山本銀介という人物とともに僧服に身をまとい旅した記録である。2人とも正式に得度をした僧侶ではなかったが、上座仏教圏での身の安全を考えて人々の信仰を集める僧衣を着用した、との記述がある。日記形式で書かれた記録は人々の生活の様子、衣食住の様子が仔細に記されており、当時の風俗、習慣を知る上でも貴重な資料となっている。

2-5 日本人の見たラオ文化と生活

彼らの旅は、現在のバンコクからチャオプラヤー川を上りアユタヤを経て、ラオ文化圏の入口であるコラート（文中ではコラット）に至っている。シャム、ラオ文化圏の相違がみられる記述は、コラートを出発後、徒歩五日目から現れる。「五日、晴、早朝ボンタクロー村に入る。人家四戸、朝食の後森林を廻る昨日の如しボアノエ村にて午食す。施主は熱心なる仏教家にして年懇ろに坊等を過し、飯、魚、砂糖、煙草等を饗せり。これより北、糯米を常食とす。居民はおおむねラオス人にてシャム人を見ること稀なり」¹⁰

コラートから徒歩5日で到達した村は、すでにラオ人の文化圏だっ

たことが分かる。この実録記には毎日おおよその移動距離が記されていて、5日間の距離を加算していくとボンタクロー村は、およそ41マイル(約66キロメートル)である。同書のコラートを記述した記録には、「タイ・ラオス二つの文化が入り組む交流地らしく、シナ人が多数で、あとはシャム人、ラオス人半数」と記されているので、コラートの北部はシャム文化からラオ文化が濃厚に目立ってくるのであろう¹¹。岩本は記述上、ボンタクロー村あたりから、メコン川までの地域—現代のタイ東北部をシャム領ラオス(下ラオス)、メコン川以北仏領ラオス(上ラオス)と記述し、区別している。

シャム人はうるち米を常食するが、下ラオスに入るとラオ人のようにもち米を主食とするとも書かれており、この違いは、現在も同じである。岩本の記述には「蚕を養い絹を産す」とあり、マハシラー自身の回想と重なるような様子が書き記されている。岩本の記録にはシャムと下ラオスの国境を越えたとか、検問があったとかという記述はなく、この事例を見ても、国境概念がかなり希薄で、現代の国境意識とはかけ離れたものであったことがわかる。

3 マハシラーと教育

3-1 伝統的ラオ族の教育機関

マハシラーが生まれた当時、シャム領ラオスにはまだ近代学校制度が確立されていなかった。しかし、物心がつく年代になると祖父からラオ語を習いはじめ、よく昔話も聞いた。そして伝統的な教育施設である仏教寺院で寺子として学ぶようになる。上座仏教圏では、僧侶の世話役として子どもがその任にあたるという風習がある。寺で寝起きし、托鉢の手伝いや身のまわりの世話をするのである。1914年、8才になると寺子として僧侶から本格的に読み書きを教えられた。当時の仏教寺院では、

乾燥させたヤシの葉に鉄筆で文字を刻んだバイラーン（日本語訳ではバイタラとも呼ばれる）を教科書として、勉強するのが普通だった。仏教経典をはじめ、物語、占星術などのバイラーンもあり、今日の紙に替わる媒体である。バイラーンは主にタム文字（タムは Thamma、「法」という意）とよばれる独特の文字で書かれていた。また、仏典はパーリ語で書かれており、寺子としてマハシラーは、パーリ語、タム文字を学んだことになる。1916 年 11 才になると、少年僧（novice）となった。成人に達しないと正式な僧侶とはなれないが、一定の年齢になると正式な僧より少ない 10 の戒律を受けて、少年僧となることができる。伝統的な教育施設であった仏教寺院には勉強のために通うこともできたはずだが、僧衣をまとい寺での生活を続けたことは、マハシラーの勉強への関心がうかがえる。実際、この時期にラオ語、タイ語、タム文字、コーン文字（カンボジア語系統の文字）を習得している。寺で過したこの時期にラオ文化に深く触れたことが、ラオ文化への強烈なアイデンティティを生み、後に独立派文人となる基礎が形成されたのではないと思われる。

マハシラーの回想によれば、1917 年、12 才の時に両親の病気のため還俗し、寺の生活を一時離れるが、ほとんど同時期に宗主国であるシャムが近代学校制度の普及を図り、シャム領ラオスでもシャム政府による学校がつくられ始めた。シャム政府の通達は、兄弟のある者は少なくとも 1 人、学校に行かせるようにというものであったという。マハシラー一家は、マハシラーを学校に通わせることにした。学校は、村から 12 キロメートルも離れたところにあり、平日は学校近くの親戚の家に下宿し、週末に実家に帰るという生活を続けていた。しかし、1920 年 15 才の時、父親が自宅で飼育していた豚を売りにコラートに行った際、コレラに罹り死亡した。家業を継ぐために僧侶となっていた兄が還俗し、マハシラーも家族を手伝うため学校をやめざるを得ない状況になった。が、

ほどなくシャム政府による学校が村の近くにもでき、再び学校に戻ることができた。すぐに3学年修了試験に合格し、翌年には4学年から就学することになった。学業に秀でたマハシラーは、17歳になると地域の大都市ウボンの中学に進学し、パーリ語文法、上座仏教教理を学んだ。彼の学んだ仏教教派は、タンマユット派¹²と呼ばれ、広く信仰されていたマカニカイ派より教義が厳格とされている宗派である。

3-2 近代教育と伝統教育の狭間で

ウボンでは、昼は中学に通い、夜は仏教寺院で仏教教理とパーリ語の勉強を続けた。寺院でマハシラーの教師であった僧から、学校での勉強より寺院での勉強に集中する方が、身を立てる早道であるとの助言を受ける。

当時のシャムのシステムでは、仏教の教法試験（Nak Tham）に合格すると試験の段階によって、近代教育の学歴と同じ資格を与える制度があった¹³。近代高等教育制度が未整備であった時代なので、伝統的教育施設をその代用としたと思われる。教法試験1級合格者には、旧制中学6年次終了の資格が与えられ、上級になれば教員資格の認定、大学卒業扱いとなるシステムであった¹⁴。師である僧の助言とは、パーリ語試験が中心の教法試験3級を受ければ大学受験資格を取れ、法律学校（Law School）の入学資格を得られるというものだった。すでにシャム領ラオスからこの制度を利用して、法律学校に進み判事になった人もいた。シャムに支配された地域の農村出身者であるマハシラーにとって、宗主国の判事になることは、彼の勉強に対する姿勢の刺激となった。

マハシラーは、機会を見て地域の長老であるチャオクン・セマシォークという高僧にバンコク行き懇願する。バンコクは仏教教法の研究の中心地であり、試験が実施されるのは当時、バンコクだけであったからだ。また、僧位として最高位のソムデット¹⁵・プラマハヴィラヴォンと出会

いもバンコク行きを後押しした。プラマハヴィラヴォンは、聡明なマハシラーに相当な期待を持っていたらしい。マハシラーの軌範師¹⁶的存在として、後にマハシラーに対してヴィラヴォン姓を使うことを許したといわれる¹⁷。

バンコク行きを決意し、シャム領ラオスを出発して、バンコクのパトゥンパラワン寺で修行を続け、第一レベルの仏教教理を学び試験に合格した。390人の僧が受験し、合格者は90人であったとマハシラーは回想している。シャム領ラオスに生まれたマハシラーが支配者であり宗主国であるシャムの首都で、難関とされる試験に合格したことは、ある程度の誇りをマハシラーに与えたと思われる。その後、毎年受験レベルを上げ、2年後には第5レベルに達している。マハシラーの回想によれば、当時第5レベルに達した者は自動的に法律学校への進学が可能であったが、絶対王政下であったシャムの方針が突如としてかわり、タイ政府は、進学資格にタイの政府高官からの推薦状を加えた。植民地出身のマハシラーには当然シャム政府高官の知り合いなどいない。植民地下で育ったシャム領ラオ人の限界を感じる出来事であったに違いない。支配されている領域の出身者として屈辱であったろうマハシラーは、同じころラオスに対するシャムの侮蔑的な態度に遭遇し、これがマハシラーの生涯を一変させる出来事となった。

4 ナショナリストとしてのマハシラー

4-1 「ラオス」領域への帰属意識の萌芽

その出来事とは、ラオスで英雄とされているアヌヴォン王に対して、タイ国内で屈辱的な表現がなされていたことである。アヌヴォン王（通称アヌ王）は、シャムのラオス支配に反旗を翻し、シャムに戦いを挑んだ王として、ラオ族の英雄であった。その英雄がある出版物では、「Ai

Anu]、その王女は「Ee Khampong」¹⁸と侮辱的な表現がなされていたのだ。

アヌ王のシャムへの侵攻の背景には、当時のタイ・ラオ文化圏の急激な変化がある。西方のビルマがシャムのアユタヤ王国を攻撃、敗れたアユタヤ王国は滅亡し、王都はトンブリ（チャオプラヤー川のバンコク対岸）に移った。ビルマはラオスにとっても脅威の存在であり、1773年、シャム・トンブリ王朝とヴィエンチャン王国は同盟関係を結び、友好関係を築こうとしていた。しかし、ヴィエンチャン側は新たに勃興したトンブリ王朝を信頼しきれず、国内の混乱時に現在のチェンマイに常駐していたビルマ軍に援軍を要請したといわれる¹⁹。

ビルマはこれに応え、ラオス領内の内乱は治まるが、それは同時に双方の力関係においては、ラオス領内の一定地域がビルマの支配下に入ることであり、同盟関係を結んでいたトンブリ王朝にとっては裏切り行為ととらえられた。ラオスの有力地域を支配下においたビルマは、共同でシャムへの攻撃を持ちかけ、これに応じて当時のヴィエンチャン王シリブンニャサーンもシャムへの派兵を行った²⁰。しかし、シャムはこれに対して、ビルマ勢を追撃、さらにヴィエンチャンへも進出した。

1779年、ヴィエンチャンはシャムの侵攻にあい、シャムの支配下になった。その侵攻は壮絶なもので、ヴィエンチャンのほとんどが焼き尽くされ、捉えたれた王族の多くがシャム軍によってシャムの王都トンブリに連行され、さらにラオ族の信仰を集めていた精神的支柱であるエメラルド仏像が戦利品としてシャムに没収された。以後、ヴィエンチャンの王はシャムによって任命されるシャムの属領となった。

4-2 ナショナリストのマハシラー誕生

アヌ王は、1779年のシャムによるヴィエンチャン侵攻時に王族としてシャムに連行された一人である。シャム王からまず副王に任命される

と、シャム軍に援軍してビルマの脅威を払しょくするなど、シャムとの友好関係を築く努力を行った。事実、当時のヴィチャンチャン王の死去後には、シャム王タクシンがすぐにアヌ副王を王に昇任させるほどの信頼を得ている²¹。また、1779年のシャムによる侵攻の打撃からの復興を手掛け、寺院建立、王宮の整備などに尽力した。このような復興はラオスにそれらを可能にする潜在的な力があることである。その力をもってすれば、いずれシャムの支配下化から脱し、シャムに連行された王族等のラオ人を帰国させられると考えたのも不思議ではない。

しかしながら、アヌ王のシャム攻略の試みは、失敗に終わり、捉えられたアヌ王は国賊としてバンコクに連行され処刑された。

ラオ人にとっては、アヌ王はラオのムアンたるヴィエンチャン王国復興を託した人物であり、シャムの支配からの解放を望んだ信頼できる王であったに違いない。そのアヌ王が屈辱を受けることに、マハシラーは耐え難い苦痛と怒りを感じたと回想している。

以後、マハシラーは、ラオスの国家としての独立達成に向けてまい進するようになる。シャムはすでに近代国家建設に向けて、制度を整えつつあった。バンコクで近代国家に替わりつつあるシャムを間近に見ていたマハシラーにとって、ラオスでの近代国家体制の受容の必要性を意識していたに違いない。だが、仏領・シャム領ラオス出身の僧侶らに思いを打ち明けると、賛同してくれたものの、現実的には無理だと皆が口を揃えた。伝統的マンダラの世界観から近代国家設立に舵を切り替えていたシャムとでは違いすぎるということだろう。以後、マハシラーは、シャム領ラオスを中心に、寺院の説教や集会を通じて、ラオスの独立の必要性をシャム領ラオスの人々に訴えるようになった。これが彼の独立運動に関しての第一歩となった。

4-3 ペッサラート殿下との出会い

ラオスの独立という大志をいだきはじめて4年後の1929年、マハシラーに現在のラオスの首都ヴィエンチャンにいく機会が訪れた。宗主国フランスが、ヴィエンチャンにパーリ語学校を設立したので、パーリ語の勉強を目的として仏領ラオスへの入国を果たしたのだ。パーリ語学校の校長は、ルアンプラバン王国の王族ペッサラート殿下で、初代教授は、マハケオ・ラチャヴォンサイであった。マハケオは、バンコクで第3レベルのパーリ語を修め、ラオス文字の教科書をマハシラーらとともに最初に作ったとされる知識人であった²²。しかし、マハシラーがヴィエンチャンのパーリ語学校で学び始めて1年後、教授であったマハケオが高齢のため引退、学校が閉じられてしまう。しかし、パーリ語学校校長のペッサラート殿下との出会いは、マハシラーの将来の独立運動を決定的なものとなった。

ペッサラート殿下は、ルアンプラバンの王族で、フランスへ留学経験を持ち、イギリスのオックスフォードで1年間学んだ知識人でもあった。後に、ルアンプラバン王国の副王となり、第2次世界大戦後に日本が撤退した後の独立政府首相に指名されるなど、ラオス現代史の重要人物のひとりである。マハシラーは、ペッサラート殿下の信頼を受け、仏教研究所の事務官に任命されるなど信頼関係を構築していった。マハシラーの回想によれば、ペッサラート殿下との交流は私生活にも及び、狩りに一緒に出かけるほどの仲になったという。

同時にマハシラーの文人としての活動も積極的になる。マハケオの引退を受けて、パーリ語学校の教員となり、『パーリ語文法』、『ラオ語文法』などの書物を著し、同時に仏教教科書、少年僧のための教科書、戒律に関する本を作成している。シャム領ラオス、シャムで得た知識をラオスの人々のために還元するかのような精力的な文筆活動を行っている。

パーリ語学校でパーリ語を教える傍ら、1933年にはペッサラート殿

下の命で、ラオ文字の再編成に取り組んだ。ラオスの古典、仏典などはパーリ語をそのまま使用し、また物語などもパーリ語からの借用語が多い。旧来のラオ文字も寺で教えられるもので、すべての人が知っているわけではなかった。学校教育制度を普及させるためにも、ラオ文字の再編が求められていた。マハシラーは、ラオ文字ですべての表現ができるようにパーリ、サンスクリット文字を借用し、ラオ文字のアルファベットを作成して、ラオ語文法の教科書を執筆している。

言語は、国家統合を考えるとときに極めて重要なエレメントであることは異論のないことであろう。一つの国家が共同体としてまとまるためには、共有する言語などアイデンティティを形成する礎が必要となる²³。ラオ文字の一般化は、おそらく近代的な国家統合を念頭に置いた文化的ナショナリズムの勃興の最初であったと考えられる²⁴。

結果的に、マハシラーの考案したラオ文字アルファベットは正式なスタンダードになることはなかった。それはマハシラーのラオ文字は、シャムで受けた教育の影響からか、タイ語のシステムの影響が見られると批判があったといわれる。仏領ラオスのエリーの中には、ラオ文字がすでに存在しているのだから、タイ語のように声調記号やパーリ・サンスクリット文字を多用することはないというのが、その理由だった²⁵。だが、これを契機としてラオ語の正書法が議論され始めたことは、文化ナショナリズムを考える上で特筆に値する。

4-4 独立と政治参加

文人としての貢献を仏領ラオスで続けてきたマハシラーに、独立運動家としての最初の試練が訪れる。1940年、タイは同盟国側に付いたピブン・ソンクラーム首相が大タイ主義²⁶を提唱、フランスに対して「失地回復」を要求した。フランスが支配下とした仏領インドシナのうち、フランス侵攻以前にシャムが支配下に置いていたラオス、カンボジアの

領地の返還を求めたのだ。シャムはラオスのペッサラート殿下に使者を送り、「失地回復」政策を説明した。これに対してペッサラート殿下は、反対はしなかったものの、シャム領ラオス（現在のタイ東北部）のように、タイの完全な支配下にはいるのではなく、自治権をある程度保障した保護領として認めてほしいと主張した。

このペッサラート殿下の方針には、王家の存続という希望があったと思われる。18世紀以降、ラオスはシャム、フランスの支配下に入ったが、王族の存在自体は認められていた。シャム領ラオスには王家は存在せず、従ってタイの完全な支配下となったが、それが仏領ラオスにまで及べば、ラオスはタイの王室の完全な領土になってしまう。それは王室の衰退を招くことになりかねない。しかも国力ではシャムに大きく劣っている以上、無碍に断ることもできない。そうした苦渋の中での「保護領」の妥協提案であったと考えられる。シャムはすでにラーマ5世（チュラロンコン王）時代、1880年代に近代国家としての様式を整えており、領域国家設立の自覚があった。もう厳格な領域設定に不熱心ではなくなっていたのである。とすれば、ピブン首相の主張する大タイ主義は、領土の拡大であることは明らかであり、ラオスがタイの領土になってしまうことへの危機感もあったであろう。

ペッサラート殿下の意向を受けて、マハシラーはタイ側との交渉を試みる。タイ側の代表との接触を開始したころ、フランスがその動きを察知し、マハシラーはタイの対フランス政策、つまり「大タイ主義」に近い人物として、彼自身をはじめペッサラート殿下の側近を拘束する動きに出た。仏領ラオスに留まれば当然逮捕される。すでにフランスに包囲されていることを知ったマハシラーは仲間43人とメコン川を渡り、シャム領ラオスに逃れた。だが、マハシラーの家族はしばらく拘束され、その後マハシラーの後を追ってタイに渡っている。

ラオス独立の野心を抱いて以来、マハシラーにとっての最初の政治的

な関与は、タイへの亡命という不本意な結果に終わった。

4-5 亡命時代の「果実」―ラオ族古典書の発見

タイ・ピブン政権（同盟国側）の庇護をうけ、マハシラー等はバンコクに送られ、バンコクでそれぞれ仕事を与えられた。マハシラーは、タイ国立図書館に配属され、主にラオスやチェンマイから運ばれてきたバイラーンの古文書の整理を担当することになった。しかし、政治的亡命生活中、バンコクで思わぬ発見があった。

1941年12月8日、日本が英領ビルマ、インドに攻め入るため、タイに進駐しはじめると、バンコク市全体が戦火に巻き込まれ、国立図書館所蔵の古文書も焼かれてしまうかもしれないといううわさが広まった。木箱300個分の古文書をバンコクからチャオプラヤー川対岸のトンブリの寺院に保管し、そこで整理作業をすすめることにした。整理作業を続けていると『タオフンタオチュアン』というラオスの古い物語を見つけた。読み進めるうちに、『タオフンタオチュアン』はラオ文学の中でも最古の部類に入る重要な物語であることに気付いた。バイラーンの最初の部分は欠損しているものの、記された奥付から現在のラオス北部のシェンクアン県から1888年頃に運ばれたものであることがわかった。

バイラーンは印刷物でなく、手書きなので写本のように作成されていく。また、写本した人の名前が記され、注釈なども書き加えられて伝わっていく。1888年頃にはシェンクワン地域で紛争が起きたためバイラーンも他の地に移されたと考えられる。さっそく、マハシラーはタイ文字で書き起こし、1000部を出版したという。

タイの思想家、チット・プーミサックは、マハシラーによって書き起こされた『タオフンタオチュアン』は、少なくとも1300年代に書かれた散文形式の物語であり、ラオ族の起源にも言及している貴重な書物

であると記している²⁷。その中でラオという呼称は、広義のタイ (Tai) 族の中でも、自由という意味の「タイ」という呼称より上位に位置していたと分析している²⁸。

マハシラーは、こうした古文書の発見、精読を通して改めてラオ族独自の文化基盤を感じていたに違いない。タイ国立図書館所蔵のバイラーンからは、他にもラオスの古典文学である『サンシンサイ』『インティソン』などを発見し、現代文字に書き起こしている。後に、これらはラオスで出版された。この時期独立に不可欠なラオ族の文化的アイデンティティを再認識した点では、亡命時代の果実といえるかもしれない。

1942 年になると、仏領ラオスからメコン川対岸のシャム領ラオス、ノンカイに残してきた家族との生活を始める。身分としてはタイ政府の広告局所属として働き、同時にラオス解放に同調する同志らと多数知り合うことになる。タイのピブン政権による大タイ主義は、広義のタイ族は同胞として連帯すべきとしていたので、仏領ラオスに対してメコン川の対岸から、教宣する作戦がとられていた²⁹。ただ、マハシラーの生活は苦しく、売れるものはなんでも作り、モーラムというラオ族独自の民謡の作詞などで糊口を凌いでいたという。

5 ラオス独立の夢と現実一束の間の独立

5-1 反仏勢力への参加

1942 年になると、タイ国内で同盟国側を支持するピブン首相に対して、連合国側を支持するプリディらが率いる地下組織「自由タイ」が組織化され、同盟国側に疲弊に比例するように台頭した。連合国側の支援を受けつつ、ピブン首相が退任すれば、「自由タイ」が政権をとるという戦略がとられていた。同盟国の衰退は、同様にラオス独立運動家たちの刺激となった。ラオスでも同じような反日本組織を作り、日本が撤退

した後、ラオス人による政権の樹立を模索したのだ。シャム領ラオス（東北タイ地方）では、「自由タイ」の分派組織として「自由ラオス（ラオセリー）」が結成され、反日、反仏を共通項として活動していた。ラオセリーの拠点は、シャム領ラオスであったが、タイセリーの支配下であり、アメリカの政府組織から支援を受けていた³⁰。

マハシラーもラオス国内の人脈を活かして独自の工作を行っている。回想録によると、1944年、ラオス独立の好機とみたマハシラーはメコン川を渡り、ペッサラート殿下に面会を求め、独立を促そうとした。日本軍の仏印進駐によってフランスが撤退し、同盟国側の日本も衰退している。日本軍がこのまま撤退すれば、日本、フランスに替わり、独立の機会が訪れるに違いない。当時、副王であったペッサラート殿下を首班とした政権樹立を願い出るためだった。ペッサラート殿下はルアン普拉バンに滞在中で会えなかったものの、ヴィエンチャンにいた皇太子シーサワン殿下に謁見した。話を聞いた皇太子は、ラオスではまだ大国の保護が必要という立場にあり、列強を無視するわけにはいかないと独立の意志はないことを明確に話した。せっかくのチャンスを活かすことができなかったマハシラーは落胆し、手ぶらでシャム領ラオスに戻らざるをえなかった。朝貢関係（この場合はフランスとの関係）を確立させてその中で安心を得るという伝統的マンダラの価値観から皇太子は脱しきれなかったのだろう。

5-2 ラオ・イッサラの結成

ラオ人運動家によるラオス独立運動は、急速に発展していった。その理由の一つは、ラオス独立という共通項があったことである。ラオス独立への願いはどんな考えを持つものを一致させる力を有していた。参加メンバーには、タイの自由運動、その下部組織ラオ・セリーも、しかも「大タイ主義」政策を実施したピブン・タイ首相に庇護された人々も参加し

ていた。

運動家たちの共通項は、当面「反日」であった。日本軍はもとより同盟国側は大戦において不利な状況であることは自明であったし、もし日本が進駐³¹し、日本軍の主導のもとにラオス王国がフランスからの独立を宣言すると、タイの反日組織と協力して日本を撤退に追い込み、ラオス完全独立にこぎつけるというものであった。これが基本的なシナリオで、すでにタイセリー（自由タイ）のラオ人組織ラオセリー（自由ラオス）は、アメリカから軍事的な訓練を受けており、結束すれば日本軍撤退までこぎつけるのではないかと考えられた。

ラオ人運動家の結束が図られる中、マハシラーは自らのグループの名前を仲間らと話し合い、「ラオ・イッサラ（自由ラオス）」とすることにした。タイセリーの一部としてではなく、ラオ人組織であり、ラオスの植民地からの解放と独立をラオ人によって達成するという意味合いが込められていた。タイ語、ラオ語では、セリーとイッサラの双方とも「自由」という意味があるが、「イッサラ、Issara」には、パーリ語の原義では、「自在者、主宰者」という意味³²で、仏典の漢訳では「自在」と訳されている³³。より「自らの自由」ということが強調されている表現であり、タイとの違いを暗示した名称といえるだろう。ラオ・イッサラは、日本軍撤退後、政府の名称として使われることになる。

5-3 日本軍撤退とラオ・イッサラ政府

1945年8月、第2次世界大戦は日本の降伏をもって終了し、ラオスからも日本軍が徐々に撤退し始めた。日本が撤退すれば、フランスが再占領に動き出すかもしれない。マハシラーは、急ぎヴィエンチャンでペッサラート殿下に会うべく謁見を求めたが、日本軍が完全に撤退しておらずルアンプラバンの王宮から出られないため、スワナプーマ殿下が代理としてマハシラーらに会った。スワナプーマ殿下は、フランスで高等教

育を受けた知識人であり、後に首相を務めるなど、1975年の社会主義政権樹立まで、混乱を続けたラオスの重要人物の一人である。マハシラーの提案は、日本は撤退したのですばやくラオス独立を宣言すべきというものであった。ペッサラート殿下が国王の摂政兼首相として、联合国側に信任が得られるよう独立宣言の文書を作成することを要請した。スワナプーマ殿下は、すぐに要請にこたえ、摂政ペッサラート殿下署名による親書が完成した。

親書を受け取ったマハシラーは、さっそくメコン川を渡り、自由タイ組織のアメリカ人リーダー、同じくイギリス人リーダー、シャム領ラオスのノンカイ県知事に親書を渡すと、ヴィエンチャンにとんぼ返りして、联合国ラオス事務所を設立した。事実上の政府設立準備事務所である。しかし、マハシラーを始め当時のメンバーには政治的経験が乏しく、武力もない。そこで、シャム領ラオスに滞在する同志にヴィエンチャンへの帰還を呼び掛けた。元シャム領ラオス、現タイ東北部のウボンからメコン川沿いを南下し、ムックダハーン向かい、活動家たちを説得して回った。メコン川沿いの町ムックダハーンでは、ラオス側から多数の日本兵がメコン川を渡りラオスからタイに逃れてくるのを見た。日本軍の撤退を目の当たりにしてマハシラーは、ラオス独立の夢が現実になりつつあることを確信したに違いない。回想によれば、道中ラオスの国旗のデザインを考えつつムックダハーンからメコン川沿いに徒歩で北上したという。そのとき考えた国旗の図案はラオス人民共和国成立(1975年)後も採用され、現在まで使用されている。

5-3 ラオ・イッサラ政権の短い春

ラオ・イッサラ政権は、1945年10月12日に独立宣言を行った。早速、閣閣が行われ政府機構が整えられ始めた。マハシラーは、閣僚の申し出を固辞し、教育相顧問に着任した。以後、ラオス政治に重要な役割を担

う「ラオペンラオ（ラオス人のためのラオス）」の準備創設委員も務めた。また、同時に立憲君主制をとりいれたタイ憲法を参考に、ラオス憲法草案作成に着手している。

しかしながら、ラオス初の国家建設の試みは短命に終わった。1946年4月にフランスがラオスの再支配に乗り出したことが決定的な要因になったが、他にも国王が最後までラオ・イッサラ政府の統治よりフランスの保護を優先する姿勢を見せていたこと、政権自体が外交や財政に未熟であったことが理由としてあげられる。フランスの再侵攻によって、ラオ・イッサラ政権幹部やその家族はバンコクに亡命、バンコクで臨時亡命政府を組織した。その中心になったのは、ペッサラート殿下（ラオ・イッサラ政権首相）、スパンヌオン殿下（後のラオス人民共和国初代大統領）、スワナプーマ殿下（後の首相）だった。マハシラーは、バンコクの臨時亡命政府に深く関わらず、東北タイ（旧シャム領ラオス）に滞在していた。

1948年、タイの政治事情が変わり、マハシラーらにタイ当局からラオス人活動家に対して拘束の危機が訪れた。タイ国内では大タイ主義を唱え同盟国側についたピブン首相が復権して、ラオ族が多く居住する東北タイ部にラオナショナリズムが起こることを警戒したという見方もある。身の危険を感じたマハシラーは、1948年12月ヴィエンチャンに戻った。

仏領ラオスには、フランスの復権後、フランス保護領下において大幅な自治が認められ、1947年には総選挙（男性のみ）が実施されていた。マハシラーはまず、国会に事務官として働きはじめた。

マハシラーは、ラオ・イッサラの中心的な存在であり、主要人物は亡命を余儀なくされていた状態での帰国だった。国会の事務官の地位は高くないが、独立後の政府としては知識人としてのマハシラーの蓄積を必要としていたのかもしれない。

5-5 政治からの撤退―文人マハシラー

1951年に、マハシラーは教育省宗教局に移る。完全独立後、1954年のラオス総選挙に立候補し落選したことを除くと、この時期からマハシラーの活動は、政治的なものよりむしろ文人としての活躍の比重が高くなっていった。

マハシラーが政治活動から引退後、ラオスは激動の時代に入り、王政支持の右派、インドシナ共産党の流れを組む左派、そして中立派も加わり、政情は不安定な状態が続いた。さらに、ベトナム戦争と関連したアメリカのラオスへの介入などもあり、常に政情は不安のままであった。

マハシラーと独立運動を共にした多くの人々が、政治的に中心的な役割を果たす中、彼の仕事は、文学、教育関係が中心となっていた。1952年にラオス教育省の文芸委員会設立に関わり、文芸局の事務官を務め、同時にフランス初代の副総領事パビューの名を冠したヴィエンチャンのリセパヴュー（パヴュー高校）でラオス文学を教えた。一方で、長年集められていたバイロン研究のための時間ができ、研究に没頭してラオス語、ラオス文法に関する書物を多数出版している。1963年には教育省を退官し、その後も王立アカデミーの顧問、宗教省顧問などを務めた。1974年に高校の教員向けハンドブックを著しているが、これがラオス王政時代の最後の作品となった。

1975年、国王が退位し、これに伴い王政も廃止され、ラオス民主人民共和国が成立した。約30年の内戦は終結の時を迎えた。1975年12月の社会主義政権成立後は、マハシラーには新政府から国立教育科学研究所の名誉顧問の地位が与えられた。

6 おわりに

ラオスナショナリズム形成に、多大な影響を与えたマハシラーの独立への活動であるが、マハシラーのこれらの業績や活動については、批判も多

い。その批判の一つは、シャム（タイ）との関係性である。シャム領ラオスに生まれたということはともかく、高等教育までバンコクで受けた影響が強すぎるというものである。ラオスの歴史、文化に豊富な知識を持っていたとしてもタイの影響が強く、例えばラオ文字の正書法を作成した時も、ラオス語がタイ語に近づいたという批判があったことは、前章で述べた³⁴。また、ラオ族のアイデンティティ形成には熱心であったが、ラオスの領域の人口の4割を占める少数民族への配慮が見られず³⁵ ラオ族のエリートの域をでていないという批判もある。

しかしながら、王族や有力領主が常に指導者として登場するラオス史の中では、農村に生まれた市井の知識人でありリーダーであったことは異色である。王族や有力者でなくともラオ人としての自覚を持ち、伝統の中で培われてきたリソースを持って学べば、誰でもラオス国家、社会に貢献できることを示しているのではないかと思える。大きな権力に頼ることなく独力で学び、ラオ族のアイデンティティに目覚め、ラオス古典等を現代訳にするなど、身に付けた知識を生涯にわたってラオスに還元することを使命としたマハシラーの存在は特異である。

ラオスの独立後からの政治的混乱の主役たちは、王族であり、地方の有力な領主であり、またインドシナ共産党という権力であった。それは、それぞれのファクションの力関係を確認していくようなマンダラの価値観から脱していない伝統的な統治体制のようにも映る。

そのような政治の動向よりも、アイデンティティを形成するための文人としての矜持を貫いたのは、権力の闘争に疎い「田舎の生まれ」である彼だからこそ出来たのかもしれない。

ラオス現代史の中の傑出した存在といってもいい。

注記：本稿は、平成23年度科学研究補助金（基盤研究（B））課題番号23402026「境界国家・ラオスの生存と発展：政治・経済・社会

のアクターと大メコン圏」による研究成果の一部である。

【参考文献】

〔日本語〕

アンダーソン、ベネディクト白石隆・白石さや訳 2007『定本想像の共同体―ナショナルイデオロギイの起源と流行』書籍工房早川

石井米雄 2003 (1975)『上座部仏教の政治社会学』創文社

磯部啓三編 1999『ベトナムとタイ―経済開発と地域協力』大明堂

岩本千綱 1989『シャム・ラオス・安南 三国探検実記』中央公論社

ウィニッチャクン、トンチャイ 石井米雄訳『地図がつくったタイ―国民国家誕生の歴史』明石書店

上東輝夫 1990『ラオスの歴史』同文館

スチアート・フォクス、マーチン 2010 菊池陽子訳『ラオス史』めこん

中村元 1985『東洋のこころ』講談社

中村元 1986 (1969)『原始仏教の成立』春秋社

富田竹二郎編 1997『タイ日大辞典』めこん

プーミサック、チット 坂本比奈子訳 1992『タイ族の歴史』井村文化事業団刊 勁草書房

後藤乾一編 2002『岩波講座 東南アジア史 8―国民国家形成の時代―』岩波書店

水野弘元 2011 (2005)『増補改訂バリ語辞典』春秋社

ヴォンウィチット、プーミー、平田豊訳 2010『激動のラオス現代史を生きて』めこん

矢野暢 1984『東南アジア世界の構図―政治的生態史観の立場から』NHK ブックス

〔英語及びラオス語文献〕

Ivarsson, Soren “*Creating Laos - The making of a Lao Space between Indochina and Siam, 1960-1945*” Nordic Institute of Asian Studies, Copenhagen 2008

Stuart-Fox, Martin “*Historical Dictionary of Laos*” The Scarecrow Press, Maryland, 2008

Viravongs, Maha Sila “*History of Laos*” Pragon Book Reprint Corp. New York 1964

Viravongs, Maha Sila “*Phongsawadan Lao*” Hongsamut hen sat Lao 2001 (1958)

Viravongs, Maha Sila “*My Life*” Vientiane 2004

- ¹ Ivarsson *Creating Laos* p26
- ² 本稿において、基本的にタイ、ラオスに関する表記は以下のようにしたい。タイについては、国名とした初めて使用された 1939 年以前はシャムとし、それ以降はタイとする。ラオスについては、ラオス国に関する際にはラオスとし、ラオ族の文化、民族に関してはラオとすることとする。タイ (Tai) 族は中国南部の雲南省から南下した民族であり、ミャンマーのシャン族、タイのシャム族、ラオスのラオ族などは同系とされる。現在の国名タイ (Thai) は、大タイ主義が提唱された結果、タイ族統合の視点から名づけられたと考えられる。
- ³ シャムの宮廷内で現代の地図の概念が、導入されたのは 1880 年代前半、後のシャム国王モンクット殿下が主導したものであった。ウィニチャクン『地図がつくったタイ』p71-83
- ⁴ 上東輝夫『ラオスの歴史』p16
- ⁵ 矢野暢『東南アジア世界の構図』p84-90
- ⁶ スチュワート・フォックス『ラオス史』p18 および Stuart-Fox *Historical Dictionary of Laos*, p207
- ⁷ 本稿のマハシラーについての記述は、マハシラー自身による回想録、Maha Sila Viravongs *MyLife, Sivit Phuu Khaa* (ラオス語) p23-73 に依っている。本書は、ラオス語、英語対訳表記されており、主に英語部分を参照し、必要に応じてラオス語を参照した。特に注記がない場合は、この回想録からとっている。
- ⁸ ヴォンヴィチット『激動のラオス現代史を生きて』p13-25
- ⁹ 本稿では、岩本千綱『シャム・ラオス・安南 三国探検実記』中央公論社 1989 に依った。
- ¹⁰ 岩本、前掲書 p46
- ¹¹ *Ibit.* p44
- ¹² シャムのモンクット王が王子であったころ、19 世紀後半に確立された宗派。より仏教の教理、規律に厳格とされる。シャム領ラオスにもその影響が及んでいることが上記の事実から推測でいる。その影響はラオス独立後にラオスにも及んだが、革命政権下ではラオス仏教同盟が組織化され、伝統的な宗派は解消された。Stuart-Fox, 前掲書 p342
- ¹³ 石井米雄『上座部仏教の政治社会学』p187
- ¹⁴ *Ibit.* p187
- ¹⁵ Somdet 仏教教団における最高位の称号。
- ¹⁶ 上座仏教では、出家する際の師を guru と呼び、その後 10 年を経て acariya と呼ばれる軌範師につく習わしがある。マハプラヴィラヴォンが正式に軌範師となったという明確な記述はないが、その後のマハシラーの出版活動への援助や亡命時の世話などを行っていることを考えると軌範師的な存在であったことが容易に想像できる。

Maha Sila 前掲書 p72

- 17 回想録によると、マハシラーの姓はチャンナム (Chan-nam) で、教法試験である Nak Tham 3 級を取得すると、尊称として Maha という称号がつく。ヴィラヴォン 姓を使い始めたのは、3 級取得後である。Ibit. p72
- 18 Ai はラオ語で「長兄」を意味する。現在もタイ東北部、北部では使われる言葉ではあるが、タイ中央部では「Ai」は相手を見下すような意味合いがある。「Ee」は、ラオ語では次姉を意味する。王女に対する表現として適切ではないことは明らかである。タイ語の語彙については、富田『タイ日大辞典』p1740 を参照。
- 19 上東、前掲書 p59
- 20 Ibit. p66
- 21 Ibit. p76
- 22 Viravongs, Maha Sila “Phongsawadan Lao” p256
- 23 いうまでもなく、近代ナショナリズムについて論じた、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』論でも「言語において、(中略) ずっと重要なことは、それが想像の共同体を生み出し、かくして特定の連帯を構築するというその能力」と記されている。ラオスにおいて特定の連帯を生み出す試みであったことは想像できる。
- 24 スチュワート・フォックス 前掲書 p74
- 25 Ivansson 前掲書 p133-5
- 26 タイにおける「大タイ主義」については、村嶋英治「タイ国の立憲革命期における文化とナショナリズム」後藤乾一編 2002『岩波講座 東南アジア史 8 ―国民国家形成の時代―』岩波書店
- 27 プーミサック『タイ族の起源』
- 28 プーミサックの分析によると、タイ系民族の王族の尊称は「ラーオ」であり、「タイ」は貴族でもなく、奴隷でもない自由民に対する呼称であったと記している。前掲書 p390
- 29 村嶋 村嶋英治「1940 年代におけるタイの植民地脱却下とインドシナの独立運動」p128 磯部啓三編『ベトナムとタイ―経済開発と地域協力』大明堂
- 30 スチュアートフォックス p92
- 31 日本のラオスへの進駐は、1945 年 3 月で、日本の劣勢は明らかたっと思われる。
- 32 水野弘元『増補改訂パーリ語辞典』p67
- 33 中村元『東洋のこころ』p123
- 34 マハシラーのラオス正書法の試みは、ラオス古典に記されている表記も尊重すべきとの考え方で、ラオ語のオリジナルを継承するために文字数を増やしたものである。タイ文字はすでにパーリ・サンスクリット原典の綴りを継承する正書法を定めてあったが、必ずしもそれに従ったものではない。2010 年 9 月、ダラー・カンニャラ (マハシラーの 3 女) へのインタビュー。
- 35 スチュアート・フォックス 前掲書 p15

Maha Sila Viravongs: An Instrumental Role Played for De-colonisation, Unification of Cultural Identity in Laos

YOSHIKAWA Kenji

Professor, Faculty of Social Sciences
Toyo Eiwa University

This paper describes the process of increasing national identification of people in Laos in the 1930s-1960s in terms of an emerging nation state. It does so through a discussion of the importance of the work of Maha Sila Viravongs, whose great desire to share a personal thirst for knowledge of cultural heritage and literature with common people led to a dedication to de-colonization and national independence.

Maha Sila Viravongs was born in Roi Et, Siam formerly part of the Lane Xang Kingdom from which Laos gains its identity, presently located in the North East region of Thailand. He studied at local Buddhist temples, key providers of traditional education facilities in Theravada Buddhist countries. This experience may have been a fundamental factor in his desire to see the independence and distinctiveness of a Lao identity achieved through spread of knowledge of Buddhism and local literature. Indeed, this paper theorises that his efforts to achieve recognition of a Lao identity, based as they were in a forthright acknowledgement of unique cultural aspects to those of neighbouring countries, were of enormous importance in the formation of an independent Laos. He edited the first Lao language dictionary in 1960, and in addition wrote books on Lao grammar and Buddhist disciplines in order for lay people to understand.

Firstly, in this paper, the differences in notions of a nation in the traditional South-east Asian region context (so-called Mandala states) to that of Western nation-states are raised. It has been generally accepted that the Western-like notion of a nation-

state in Laos emerged as a result of French colonisation and the involvement of political elites including members of the royal family who were educated in France. At the same time, in this period it is worth examining how Maha Sila Viravongs utilised traditional knowledge to increase the recognition of a distinct Lao identity among ordinary people.

Secondly, following Maha Sila's biography published in 2004, his struggle for negotiation between allies and resistance groups is analysed. The paper looks at his role in the period of the Second World War though his involvement in the Lao Issara group, which temporarily ruled after withdrawal of Japanese troops in October 1945 until French recapture in April 1946. Finally, the paper discusses the influence of his work exploring indigenous cultures and its contribution to national identification in contemporary Lao society.